

IMAS プロジェクトについて

「アクティブライブラリ構想」の一環として

金子 昌嗣（学術情報課長）

図書館では昨年、大学の「21世紀の教育研究グランドデザイン策定委員会」に、「アクティブライブラリ」構想を提案しました。その趣旨は、新WINEシステム（1998年11月に部分稼働、ついで1999年6月より全面的な稼働を実現）を基礎として、しかし必ずしもWINEの枠にとどまらず、研究教育と一体化した情報サービスを提供していく、そのために図書館システムを拡充する、ということです。

その後、アクティブライブラリ構想をより具体化したものとして、「統合マルチアーカイビングサービス」（IMAS：Integrated Multi-Archiving Service）を提案し、理事会の承認するところとなりました。これは、中央図書館地下3階の自動書庫システム（「フィジカルアーカイブ」）と、後述する「デジタルアーカイブ」とから構成されています。

本稿では、アクティブライブラリ構想についてご紹介するとともに、その一環といえるIMASプロジェクトの、とりわけ「デジタルアーカイブ」のこれまでの進捗（2000年3月現在）についてご報告します。

1. アクティブライブラリ - 研究教育と図書館システムとの一体化

従来の図書館業務は、図書や雑誌や視聴覚資料など、受け入れた資料を整理して目録情報を作成し、所定の位置に置いて閲覧の用に供したり、貸出や複写などのサービスで利用者の便宜をはかってきました。そうしたサービスの基礎となる目録データベースは、WINEシステムというインフラの上で、相当に整備されてきたといえます。しかし、近年におけるネットワークやメディア技術の発展は、教育研究スタイルを変貌させつつあるのと同様に、図書館サービスのあり方にも再検討を迫っているように思われます。具体的には、WWW上の情報源や各種の電子化テキスト、マルチメディア資料などを射程に入れた、より広範囲な情報提供の可能性を模索することが、必要になっているといえます。

このような問題意識から、「アクティブライブラリ」構想では、次のような機能を実現することによって、独立した図書館システムから、研究教育と一体化した図書館システムへの拡張をめざしています。なお構想策定には、深澤良彰副館長（システム担当、理工学部教授）が尽力されました。紙数の関係から、以下は構想からの抜粋です。

（1）図書館システムを直接意識しない図書館システム利用の促進（例：辞書／事典等と

のインターフェース、教員が作成するWebページの参考図書紹介からのリンク、個々の学問分野への学習案内のハイパーテキスト化など）

（2）図書館蔵書に閉じない資料提供（例：有償／無償データベースや他図書館システムとの連動、電子ジャーナルや著者・出版者情報のWebサイトへのリンクなど）

（3）高付加価値メディアライブラリの提供（例：図書館所蔵の貴重資料のデジタル化、加えて、対象資料によって注記の選択的表示や彩色処理を可能にする仕組の実現など）

（4）各種Webサイトの連携促進（例：Webページリストの充実、学術情報関係のWebサイトの自動／半自動収集、WINEシステムとの融合など）

（5）世界に向けた情報発信（世界標準としてのWINEシステムの活用、世界規模でのILL／リソースシェアリングへの積極的参加など）

2. IMAS プロジェクト

図書館には、収蔵資料のスペース確保という課題が付きまといまいます。中央図書館の場合は現在の総合学術情報センターとして開館してから10年にも達していないとはいえ、資料のはなはだしい増

加（大口寄贈なども多数にのぼり）に直面しています。また、他のキャンパス図書館等の多くが、書庫の狭隘化に悩んでいます。それを打開する方途として、中央図書館地下3階を書庫に拡充する案が浮上しました。もともと設計段階から、将来の資料増加のための収納スペースとして考えられていた場所です。そこに、自動書庫システムを入れて収納の効率化と書庫管理の省力化を実現する方針で検討に入りました。自動書庫に入れる資料のデータについてはWINEシステムとの連動を意識して、資料がむなしく死蔵されることがないように、既存の開架書庫の延長に位置づけています。

さてIMASプロジェクトとは、この自動書庫システムを一方の構成要素（「フィジカルアーカイブ」）とし、他方に、上述「アクティブライブラリ」構想実現のいわば第1段階としての「デジタルアーカイブ」を含んだものです。資料の物理的な保管と、データの電子的保管とを統合してプロジェクトとし、1999年度の政府補正予算における補助金への申請を行ない、採択されました。

「デジタルアーカイブ」が想定しているのは、サービスとして提供すべきコンテンツがさまざまな情報源（学内外、国内外）として、多様な形式で存在しているということです。従来は、情報探索の目的に応じて、どのような書誌索引類あるいはデータベースにあたるべきかなどをまず考えなければなりません。図書館のレファレンスサービスの意義のひとつはまさに、利用者のそのような探索行動を援助することにあります。しかし、年来にわたり指摘されてきた「情報洪水」（英語ではよく“explosion”の語を用いますが）は情報環境の変貌により、いよいよはなはだしくなっています。一方で自宅や研究室から各種情報源にアクセスする機会が増え、利用者にとっては場所の制約を受けず手軽に、そしてわかりやすく、求める情報にたどりつける仕組みが望まれていると思われます。「デジタルアーカイブ」がめざすのは、こうした要望に対応できるよう、統合的なインターフェースを提供して、さまざまな情報源にアクセスできるようにすることです。

ひとつのキーワード（たとえば人名）は、関連する書籍はもとより、論文、手稿、録音、映像、授業、あるいはそれらを提供する団体のホームペ

ージなど、多様な検索結果を導く可能性があり、その必要度は探索者によってまったく異なるでしょう。サービスとしてはしかし、多様な可能性を保障し、どのような人にも求める情報がもれなく提供できるように配慮することが必要と思われる。統合的なインターフェースの実現にはそうした意義があるでしょう。このことは、アクティブライブラリ構想においてすでに意識されていました。

統合的なインターフェースの実現をめざし、デジタルコンテンツ管理、URLの収集・検索、利用者認証、そして自動書庫システムとWINEとのデータ連携などをサブシステムとして、「デジタルアーカイブ」の検討を進めてきています。

3. プロジェクトの進捗

「デジタルアーカイブ」については、今述べたような方針のもと、そして補正予算への申請を想定して、大学のシステム構築に何らかの形でかわりのある4社に対して構想に対するシステム提案を要請し、昨年末に各社からの提案を受けました。それをうけて早大側で検討し、最終的には2社（NTT東日本および日本IBM）に役割を分担してもらい、開発を含めたシステム構築を依頼することになりました。早大側ではこのプロジェクトのためのワーキンググループを組織していますが、そこには図書館のほか、メディアネットワークセンター（MNC）および教務部からもメンバーが関わっています。2000年中に、サービスを行なう仕組みを構築していく予定です。なお自動書庫システムについては、図書館と総合企画部が担当して進めています。

4. 今後の課題

「アクティブライブラリ」およびその具体化としてのIMASプロジェクトは、以上にご報告したような経緯で進んで来ました。「デジタルアーカイブ」についてはしかし、大枠についてはともかく、詳細をこれから詰めていかなければなりません。

開発において留意すべきこととしては、学内における他のプロジェクトとの連携をどのようにはかっているかということがまずあります。当面は仕組み作りが主たる作業とはなりませんが、肝心

なのはどのようなコンテンツを格納すべきかということ。その点ではMNCその他、関係箇所との情報交換や、学内のニーズに耳を傾ける必要があると思っています（ただこれまでのところ、コンテンツ作成そのものには予算の余裕があまりないのが実状です）。

IMASプロジェクトにおけるデジタルアーカイブは、ある部分が従来の図書館サービスの延長であることは間違いありませんが、その範囲を超える可能性を多分に有しています。サービスを実施

するさいにどのような組織・体制が望ましいのか、慎重に考える必要があります。

IMASプロジェクトはまだ始まったばかりで、国内に類似の先行例もほとんどなく（この点は「フィジカルアーカイブ」も同じ）模索しながら進む、ということにならざるをえません。ただ、「アクティブライブラリ」構想に示されたような新しいサービスの方向性は、このプロジェクトに限らず、図書館としてさまざまな面から追求していく必要があるでしょう。

アクティブライブラリ構想イメージ図

